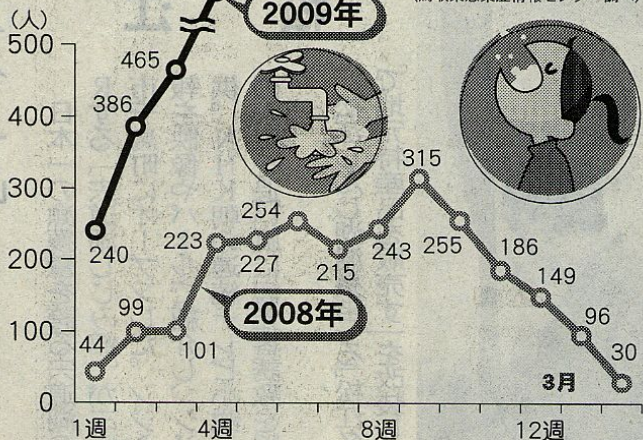


インフルエンザ県内猛威

インフルエンザ県内の患者報告状況

※県内29医療機関の定点観測
(鳥取県感染症情報センター調べ)



一月二十五日現在で、一人の約四倍。例年、県が調べた、県内二十九医療機関に報告のあったインフルエンザの今シーズンは年明け直患者数(累計)は二千三百七十人で、昨年のほぼ同じ時期(六百十

Aソ連・A香港型が混在

鳥取県内でもインフルエンザが猛威を振るっている。学級閉鎖や学年閉鎖が続出し、患者数は昨シーズンの約四倍。Aソ連型とA香港型が混合流行しており、流行が長引いたり、患者数が増える可能性もあるという。

患者増や長期化懸念

も一月二十九日現在で四十四施設。保育所を含めた集団感染の患者数は七百二十七人のべり、昨年同期(三十三人)の二倍以上だ。県健康政策課の石田茂参事は「昨シーズンは患者が少なかった。二〇〇五年の六年のシーズンは患者も多く、今シーズンが特別に大流行しているわけではない」と説明するが、今シーズンはAソ連型とA香港型が混合流行しているため、Aソ連型に感染した患者が、再びA香港型に感染する可能性があるという。一度ピークを過ぎても、再び患者数が増加に転じ、流行が長引くことも考えられる。

さらに、Aソ連型を中心にインフルエンザ治療薬「タミフル」に耐性を持つウイルスが流行。国立感染症研究所が一月に行った全国調査では、Aソ連型に感染した患者五十二人のうち、五十一人が耐性ウイルスに感染していたことが分かるなど、タミフルが効かない患者が増えている。熱が下がってもしばらくはウイルスを保持し続けることから、症状が治まってから他人に感染させてしまうことも懸念される。学校保健法では、熱が下がった日の三日後からの登校を促しており、医療関係者は「治った患者が、再びA香港型に感染する可能性もある」と思っても、医師の指示に従って十分な休息をとることが必要と

「2回感染」警戒を